ぐるり散策　大月風土記伝説の巻　井上文次郎

十四、【大布の名号（大月町）】

真木間明野の名号堂に伝わる話で、安貞年間親鸞上人が諸国巡教の折、笹子の阿弥陀海に来た際、白野の住人で佐久太郎という者が、尊号六字を書いてもらおうと、白布三尺を上人に捧げた。然し上人のお説教を聞く為、多勢の人が集まって上人のそばに近ずくことができなかった。そこで多勢の人が手を交えて白布を送り、上人に六字の名号を書いていただいたのが大布の名号である。

佐久太郎は深く感涙にむせび、上人の後を慕って京に上り、門人となり法名を永讃坊といったが、上人の没後再び真木福正院に来て、開基玄了上人に師事して、第二世を継いだという。寛正六年（一四六五）、二月二十八日の火災の折、この名号は火中から出て北方の山谷に飛び去り、夜々光を放ったという。

【福正寺のサクラ（大月町）】

真木の福正寺境内の西北端、墓地との境界に立っている。明治二年本堂が全焼した時、火勢によって東側が枯れている。根元の周囲三・七メートル、樹高約一〇メートルで、樹勢は衰弱ぎみである。

この樹には次のような話が伝わっており、当時の木の太さが想像される。昔、小金沢の奥に大きな山犬が棲んでおり、葬式の後は必ず墓地を掘り返し人肉をあさった。部落の人達はみかねて山犬退治をすることになり、その方法を思案した。それでこの櫻の幹に鉄砲をすえ付け、あらかじめ犬の来る場所に目標を定め固定しておき、布団を持参してこの樹の分岐部に泊まりこんだ。葬式のすんだその晩は闇夜だったが、山犬の来た気配に引き金を引いた。犬は悲鳴をあげて逃走したが翌日血痕をたよって追った所、一〇キロ程点々として血痕は奥山に続いた。途中で血痕はなくなり、その周囲を探したが、犬のむくろは遂に見当たらなかった。然してそれ以後墓地荒らしはばったり止んだという。

【彦田観音の松（梁川町）】

網の上彦田の観音の所に立っていた松で、周囲一丈余り枝下六間の大木であったが、数十年前枯れて、年代から推定すれば少なくとも四〇〇年ぐらい前のものであったという。

天正一一年、武田勝頼が自刃した時、その愛馬を斧窪を流れる沢の上流の仲間沢にかくしておいたがその啼き声が、郡内四方に聞こえたので、発覚を恐れこれを彦田山に埋め、その上に松の木を植えた。その後この白馬が祟って付近の作物に足跡をつけあらしたまわったので、ここに観音を祀ったところ、その後は荒らされることはなかったという。ここに馬塚が造られており、馬の靴をかりて翌年倍にしてお返しすれば養蚕が当たると信じられ、馬のワラ靴を奉納するオシラ信仰の痕が残されていた。

【築坂の一本杉（賑岡町）】

岩殿山の西にある峠で、岩殿トンネル開通前の大月、浅利、から畑倉、七保に通ずる要路であった。この峠の上約五メートルの高地に立っている。目通り幹囲約二メートル樹高約一六メートル。下部はだいぶ損傷し小空洞が幾ケ所もある。樹勢は衰弱ぎみである。

この坂は鶯坂あるいは富士見勝の地と呼ばれ、往路の人々がこの杉を目標に登りつめ、ここで冨士を眺め鶯の声を聞きながら一休みしたことが想像される。「鶯や朝日に匂う月の冨士（知足）」の句もあり、旧道の名残を止めるもので、木は余り太くないが古くから知られたものである。

【真木の直木（大月町）】

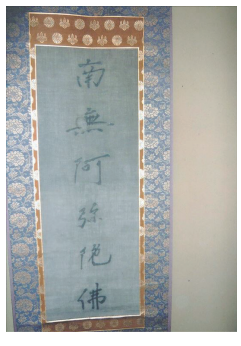
真木の徳川四代当時の義民を祀る辻バス停留所の近く、和田道長家屋敷の西端にあった。その下は急な斜面となって真木川にのぞんでいる。この一株の大杉は中天に立ち、そし部落の指標となりその下には泉がこんこんと湧き出し尽きる所を知らず、部落共同の飲料泉となり杉は絶好の日陰を提供し、人々はここに集い閑談した。

この杉は古名を直木と呼び、直径九尺あったといわれる所から推測すれば、ほぼ笹子の矢立て杉に匹敵する杉の古木であったと思われる。大正初期（一八一四年）に枯れ今は古株も存在しない。甲斐国志によれば「此所古の牧野にて村名之に起きたらんか」と記してある。甲斐は王朝時代より名馬の産地として知られ、特に甲斐の黒駒は名馬の誉れが高かった。勿論当地は之に対する史実の裏ずけはないが、東原、上原、下原等の地名が示すように肥沃な原野は充分放牧可能であったことはうなずける。以前は馬城村といわれていたが、馬城とは牛馬の放し飼いのために設定した地域といい、先住時代より選定され肥沃な原野は、牧草の発育を促し名馬が陸続と産出されたことであろう。

時を経て人口の増加は原野を耕地と化し牧野の面影は偲ぶすべもなく、だだ源泉の地に立つ杉だけが昔を伝えるよすがとなり、寛文年間に至って部落の象徴である直木（杉の古名）にあやかり、遂に馬城村は真木村と改称されるようになったといわれている。

【花咲のサクラ（大月町）】

甲斐国志巻三十九に「供養橋の東に花折と云う地あり土人相伝う古櫻の大木ありて枝葉四方にはびこり花の頃は往来の旅人のあるいは木陰に憩い技を手折かざしける故に花折と云い村名もこれより起きるとぞ」と記され、櫻の花にちなんで花咲と村名がなずけられたといわれている。花折地番は上花と前沢の中間、現中央道陸橋の下の周辺をいう。



間明野後藤家所蔵

名号堂

＜参考文献＞
甲斐国志
北都留郡誌
―今月号【福正寺のサクラ】【彦田観音の松】【真木の直木】【築坂の一本杉】【花咲のサクラ】については小林岳氏著　大月市巨樹名木誌より引用

執筆者　井上　文次郎

【謝　罪　文】

平成二十七年七月二十五日発刊の本誌大月風土記伝説の巻の（樹木に関する物）において、「矢下のサクラ」、「浅利与一手植えのムクロジ」、「上人屋藪の逆竹」、「鎌倉山の松」、「桑西道祖神のみみだれ松」、「小和田のサクラ」の各記述は、昭和四十四年、大月郷土研究会発刊、小林岳氏著書『大月市巨樹名木誌』の内容を無断で引用し、同氏の著作権を侵害したことを認め、小林岳氏に対して心より謝罪いたします。

また、七月号註1で記載した小和田のサクラに関する市の文化財の管理の不備は、事実に反するので訂正取消し、お詫び致します。

井上文次郎

井上文次郎氏謝罪文の通り小林岳氏の『大月市巨樹名木誌』の内容を無断で引用し、同氏の著作権を侵害していたにもかかわらず、著作権の有無を確認せず、漫然と記事として掲載したことにつき、小林岳氏に謝罪致します。

日本ステンレス工業株式会社
代表取締役会長　石岡　博実

九月号へつづく…